

「おおいた教育の日」エッセー入賞作品決定

「おおいた教育の日」の趣旨を広く普及・啓発するため、教育に関するエッセーを募集したところ、幅広い年代の皆さんから、たくさんのご応募をいただきました。

「一般の部」

賞	氏名	作品タイトル・内容
最優秀賞	有田 英樹 (中津市)	「東を向いて笑う」 幼い頃の、その年の初物を食べるときに「東を向いて笑う」という慣習から生じた母と子のやりとりを通して、親子のかかわり、家庭の役割を考えさせられる作品
優秀賞	矢口 利子 (佐伯市出身)	「夢に向かって」 心に刻まれた「人は年をとるから老いるのではない、夢を失った時老いが始まる」という言葉から、幾つになっても人が夢を持つことの大切さを綴った作品
優秀賞	山本 健悟 (別府市)	「私の十八年間」 障がいを抱えて生きてきた十八年間の経験を通して、先生・友人への感謝の気持ちやその大切さ、健常者と同じように、当たり前で過ごしたいという強い想いを綴った作品

「小・中・高生の部」

賞	氏名	副題・内容
最優秀賞	伊藤 暦 (県立日田三隈高等学校3年)	「私が教えられたこと」 インターン・シップを通して、「働く」ことの大変さ、お客様(相手)を思いやる心の大切さ、物事をやり遂げる達成感を体感することで、自分の将来の「職業」に前向きに取り組んでいこうとする想いを綴った作品
優秀賞	秋吉 美幸 (大分市立明野中学校3年)	「真夏の言葉」 「廃品回収」のときに近所のおじさんがかけてくれた一言で、辛いことに少しずつでも前向きに取り組んでいくことの大切さを感じ、自分の内面が変化していく様子を綴った作品
優秀賞	高野 葵 (竹田市立祖峰小学校4年)	「そまつにしたらばちかぶるよ」 祖母から教わった食べ物を「粗末にしない」「もったいない」と思うことの大切さを綴った作品で、祖母への強い愛情が感じ取られる。

「東を向いて笑う」 有田 英樹

大人って理不尽だよな。

子どもの頃、そんなふうに思っていました。近所のおじちゃん達もそう。学校の先生は少しまじだけど、やっぱり同じ。お父ちゃんやお母ちゃんなんて、遠慮がない分、ひどい、ひどい。

でもね。僕、四十六歳にして、今、少しわかるんです。そんな理屈を越えた大人の言葉の中に、何かしらの真実があった・・・。正しいとか正しくないとかいうような目盛りでは計れぬ、人としての知恵があった。そうも、思えるんです。

科学の進歩、あふれる情報、グローバルスタンダード。親の世代までは考えられなかったうねりの中に、僕らが捨て去ろうとしている計測不能な理不尽さ。少し立ち止まるべきかも・・・。そんな気もするんです。

幼かった頃、お初物を頂く時には東を向いて笑う、という妙なしきたりが、我が家にはありました。

お初物のさつまいもが食卓に並べば、母が、こう言うんです。

「さあ、今年初のおさつや。東を向いて、大きな声で笑いなさい。」

そして、僕らは「わははは。」と笑う。それが、来年も健康でおさつを頂けるようにって願掛けなのです。

そのしきたりが原因で、ちょっとしたトラブルが起きました。それは、僕が小学五年生の時でした。

食卓には初カボチャの煮物が並んでいました。父は出張で、その晩は僕と母の二人だけ。母がいつものように言いました。

「さあ、東を向いて、笑いなさい。」

でも、僕はいつものようには笑いませんでした。だって、小学校の高学年ですよ。そろそろ反抗期。加えて、重石のような父は留守。条件はそろっています。ニコリともせずに、こう言い返しました。

「お母ちゃん、こんなん、おかしいやんか。」

きょとんとする母に、畳み掛けます。

「なんで、笑って食ったら、来年も食えるんか。科学的におかしいやんか。」

完全勝利を信じた僕の鼻の穴は大きく膨らんでいたことでしょう。しかし、母は哀れむような目で言いました。

「お前、学校行って、何、勉強しとる？」

意表をつかれました。だって、学校とは何の関係もないことですよ。しきたり自体の理不尽に加え、この言葉。でもね、あまりにも意外な言葉は強いんです。言い返す言葉が見つからない。母は続けます。

「お初物のカボチャが出た。黙々と食べるのと、家族がそろって笑って食べるのと、どっちがいいか、わからんか。」

「・・・・。」

「何が科学的や。皆で笑う・・・。それが幸せや。そこに、理屈は、いらんぞ。お前、学校に行って、何、勉強しとる？ つまらん理屈を覚えて、カボチャ頭になっとるぞ。種ばかり増えたカボチャは、実が少なくなっておいしくないんだ。」

黙り込む僕に、母はニコリとして言います。

「勉強は『小利口（こりこう）のバカ者』になるためにするんじゃない。何のための勉強か、考えてみい。ほらほら、はよう笑って頂きなさい。」

僕は、なめくじのようにしぼみました。

それから、三十年以上が過ぎ、母はずいぶん前に亡くなりました。そして僕は二人の子を授かり、新しい家庭を持つことができました。

母はいない。偏屈だった父も年老いた。でもね。僕は、笑ってるんです。東を向いて。

「夢に向かって」 矢口 利子

八年ほど前、某テレビ局で「夢は遙かな山々へ」と題した、人間ドキュメンタリー番組を放映したことがあった。そこには、老いてなお夢に立ち向かう、凄まじいまでの山男の姿が映し出されていた。

福岡の大学教授（元医師）Aさんである。八十五歳という高齢でスイスのマッターホルンを登頂、しかも国内外合わせてこの時が二百登目だと言っていたが、あのパワーは一体どこから生まれてくるのだろうか。そのAさんが若い頃ドイツに渡り、師と仰ぐシュヴァイツァー医師と共に医療に携わる中で、教えられた言葉があったという。

（人は年をとるから老いるのではない、夢を失った時老いが始まる。いつまでも夢に向かって精進しなさい）

ガーンと一発パンチを喰らったようなショックを覚えた。まもなく人生の節目である還暦を迎えようとしていた矢先のことであった。これといった夢も目標もなく、ただ毎日を無抵抗のまま流されているだけの私に、何をやっているんだと言わんばかりに、叩きのめされたような気がした。

天を突くようなマッターホルン（四四七七メートル）の頂上をめざして、体力の限界と闘いながら、力強く一步一步確かめるように登っていく。ただ黙々と雪を踏みしめていた強靱な横顔がとても印象的で、山頂にたどり着いた瞬間、わたしは感激のあまり思わず涙があふれてしまった。

素敵な人生を歩んでいる人は、自分なりの価値観や、他人に流されない確固たる信念を持っていて、自信に満ちあふれている。柔和な表情やしぐさ、穏やかな語り口調、百戦錬磨の強者らしい鋭い眼差しに、キラリと光る品格さえ感じ取れた。

来し方を振り返れば、心に感銘を受けた言葉は数知れないが、そのひとつひとつをなぞってみると、なぜか、すべて「夢」に辿り着くから不思議だ。不甲斐ない私にも、数多くの夢を見てトライした過去がある。たとえそれが挫折という形で終わったとしても、決して無駄ではないのだと、この言葉を聴いてそう思えるようになった。

二〇〇二年の暮れに、夫がパソコン・デジタルカメラ・プリンターの一式を我が家に持ち帰ってきた。ご多分に漏れず、ついに夫もパソコンを始めるのかと思いきや、「僕は全く興味ないから、母さん、早速パソコン教室に行ってお習いしなさいよ」

否応なく、翌年から教室に通うことになった。六十五歳の春のことである。初めのうちはごく簡単なカリキュラムで高齢者を飽きさせない。初級を終え、中級にはいると途端に難しくなり、偏頭痛に悩まされ、途中で用事と偽り、教室から抜け出したこともあった。（どうしてこんなことを始めたんだろう）後悔しきり、夫を恨めしく思い、パソコンなんかもうやめようと悩みました。やがて一歩進んで二歩も三歩も戻りつつ、メールやインターネット、デジタルカメラで取った写真を取り込み、発信できるようになったのではないか。

（人は年をとるから老いるのではない、夢を失ったとき老いが始まる。いつまでも夢に向かって精進しなさい）

あの日以来、座右の銘は？と聞かれたら、胸を張り「夢に向かって」と答えてしまうほど、私の心に強烈に刻み込まれたことを思い出す。

そして、六十八歳になった今も、小さな夢を追い続ける毎日である。

「私の一八年間」 山本 健悟

私は、極小未熟児。その上、二分脊椎症という病気を持ってこの世に生を受けた。

この病気は、背中と背骨に穴があいて神経が麻痺する病気だ。両親は福岡・山口・東京と様々な病院に連れて行ってくれたが、下半身の麻痺は、まだ治っていない。

小学校入学の際、両親は普通校か、それとも養護学校に入学させるかで悩んだそうだ。

しかし、私は幼稚園の頃の友達と一緒に普通校に行きたいと思っていた。そんな私の思いを知った両親は普通校に入学させることを決めたそうだ。

しかし、小学校側は、「障害児学級ならばいいが、普通学級ではだめだ！」

と言ったそうだ。だが、両親は諦めずに何度も学校に話し合いに行ったそうだ。その結果、「いじめなどがあつたらという心配はあるが、まあ、いいだろう。」と言ってくれたそうだ。

小学校に入学後、しばらくは、やはりいじめられていた。しかし、いじめられる度に、「オレはオレ、こんな体で何が悪い。お前達がこんな体だったらやっつけていけるか。」と言っていた。そして、三年・四年と学年が上がっていく内にいじめはなくなっていった。

小学校の低学年までは、運動会などでは回りに迷惑がかかるからとハンディをもらうのが当たり前とされていた。本当はみんなと同じ様に走りたかったのだが、それを言う勇気が無く、自分から引いてしまっていた。しかし、担任の先生が私の気持ちを汲んでくれ、クラスのみんなに向かって、

「健悟は特別ではない。このクラスの一人ではないか。健悟だけハンディがあるのはおかしい。」

と言ってくれた。それからは、体育や中学の部活などハンディもらわずに積極的に取り組んできた。

高校での、競歩大会では一年の時、半分しか走れず、とても悔しい思いをした。だから、二年になったら絶対に完走したいと思っていた。

大会当日、本当に自分は最後まで走ることができるのだろうか。と少し不安に思っていた。しかし、そんな私を見て、担任の先生が、

「健悟、大丈夫だ！お前なら完走できる！それにどんなに遅くなっても、オレと一緒に走ってやる！」

と言ってくれた。その言葉で気持ちが楽になり、安心して走ることができた。途中、足が痛くなり何度も諦めそうになった。しかし、すれ違う友達がみんな、

「健悟、頑張れ！」

と言ってくれた。それだけで、足の痛みが軽くなるような気がした。そして、やっとゴールがみえた時、私は、信じられない光景をみた。二年生全員が、ゴールで待っていてくれたのだ。その時、私は本当にいい友達を持ったと思った。

私は、この一八年間、友達や先生に支えられて生きてきた。本当にみんなには心から感謝している。

しかし、私のように先生や友達に恵まれ、普通校に通える障害者は少ない。それは、おかしいことではないだろうか。

私は、障害は一つの個性だと考えている。障害はただ走るのが苦手・話をするのが苦手などと同じことではないだろうか。

世界の人々が、障害者は健常者となんら変わりがないことを理解してもらいたい。

そして、いつの日か障害者も普通校に、みんなと同じように通える日が来ることを願う。

「私が教えられたこと」 伊藤 暦

私の学校では、二年次に「夏の活動」という取り組みがあります。夏休みを利用して自分の進路のために、上級学校のオープンキャンパス、職業人へのインタビュー、企業でのインターン・シップに参加する、というものです。

私は、迷わずインターン・シップに参加することに決めました。それは、今の私が実際に企業で働くことは、めったにできることではないし、今の自分の力を試し、新しい力を身につけられるかもしれない、すばらしい機会だと思ったからです。そして少しだけ「楽しそうだな」という気持ちもありました。

私はインターン・シップ先に、市内のある旅館を選びました。旅館を選んだのは、観光の街である日田市に暮らす私にとって、身近な職場であることや、幼い頃からよく旅館を利用していたので興味があり、その仕事の裏側を知ってみたいと思ったからです。

私は三日間、インターン・シップを体験しました。この三日間を通して、旅館に対する私の印象は、全く違うものになりました。インターン・シップに参加する前は、旅館は華やかで、ゆっくりとした時間が流れている場所だと思っていました。しかし、実際に働いてみると、その空間を作り出すために、裏側ではたくさんのスタッフの方々が一生懸命になって時間と闘っていました。そんな御苦労があるからこそ、旅館は美しく華やかな場所とゆっくりとした時間を、お客様に提供することができていると感じました。例えばルームメイクでは、お客様が入れ替わるわずかな時間で、布団をたたんだり、掃除機をかけたり、拭き掃除をしたりと、とても慌ただしく時間が過ぎました。その上、布団はそれぞれにたたみ方・しまい方が決まっていたし、床の間の花の配置場所、洗面所の水滴や汚れ、座布団のシワ等、細かいところにも気を配らなければなりません。この時に、従業員の方がおっしゃった、「お客様が時間を忘れて、くつろげるように」という言葉が強く印象に残っています。この言葉から、限られた時間の中で多くのことをしなければならなくても、「第一にお客様のことを考えている」という思いやりの心が伝わってきました。

様々な場面で、人と人との間に思いやりの心が失われつつあると言われている今、私は従業員の方々のお客様に対する思いやりの心に触れました。そして私自身も「これで大丈夫だろうか」「この部屋でゆっくり過ごしてほしい」と、自然にお客様のことを思いながら、作業をすることが多くなりました。

三日間の仕事は、私の想像とは比べものにならない程きつく、大変なものでした。しかし、この自然と湧いてきた「人を思いやる心」をはじめ、実際に働いたからこそ学べたこと、得ることができたことがたくさんあります。従業員の方が初めて私の名前を呼んで下さり、仕事を頼まれた時や、「あなた達がいてくれて本当に助かった。明日からいないと思うと寂しいね。」と言ってもらえた時にはとても嬉しかったです。一つ一つの仕事をやり遂げる度に「やりがい」というものを感じました。そして、お客様に見えない所での努力があるからこそ、仕事が成り立っていること、どんな職業も絶対に必要であること、「働く」ということに決して楽はないということ、身をもって学ぶことができました。

私は将来、児童英語教師になりたいと思っています。今回の体験を通して、どのような職業も必ず必要とされることや、「見える所」「見えない所」での両方の仕事が必要であることを理解できましたし、物事を最後までやり遂げる達成感を味わうこともできました。ですから、自分の将来の夢の実現のために、これからどんなことにでも頑張れる気がしています。そして、ただ英語を教えるだけでなく、生徒の心に「何か」を残せるような教師になりたいです。従業員の方々が、私にそうしてくれたように。

「真夏の言葉」

秋吉 美幸

「廃品回収」、昔の私がとても嫌な言葉でした。とてもやる気が起きず、いつも適当にしたり、友達と話したりして、これをするダルさをまぎらわしていました。しかし、中学二年のときの経験が私の廃品回収に対する思いを変えました。

中学二年の夏、地域でする廃品回収に私は嫌々ながらも出席しました。しかし、いつも通りに適当に、ダンボールや缶、ビン、ペットボトルを分別したり、その作業が一通り終わったら、友達と話したり、ふざけたりしていました。

その時、ガラガラと大きな音がしました。音のした方を見ると、さきほどまで、私と友達が作業していたところがかずれ、グシャグシャになっていました。大人達はとても大騒ぎし、怪我をした人はいないかなど、とても必死になって探していました。私と友人はとても罪悪感があり、大人達を手伝い、なんとか缶を別の所に移動させました。幸い怪我をしている人もいなく、良かったのですが、私は自分の過失がバレるのが嫌で、その場から逃げ出したいと思っていました。

すると私の前に近所に住んでいるおじいさんが来て、
「あんた達がちゃんとしておけば、こんなに大変な事は起きなかったのに」と言いました。

しかし、その時、ある人が、
「この子達は必死にしていたんや。そんなに責めたらかわいそうやで」と言って私達をかばってくれました。私はその人に申し分けないと思いました。なぜなら、とても適当にして、必死にはしていなかったからです。

その後その人が、
「あんた達も当たり前なのが上手にできんかもしれん。やけど、当たり前な事を当たり前のようにできるようになったらな、人は成長するんや今はまだできんや。少しずつできていけばいいんやで」と言ってくれました。私にはその言葉がとても心に響き、涙で目の前が見えませんでした。この言葉は、私達を責める言葉ではありませんでした。やさしく言い聞かせる様なこの言葉は私自身の心にしみ入っているのがわかりました。

その後から私は変わりました。今まではダルいなどと思ってしなかった事に積極的に取り組むようになりました。地域のゴミ拾いでも、皆がしていなくても、皆に呼びかけてしようと思いました。でも時々嫌になったり、面倒くさくなったりしてしまいます。その時はあの真夏に言われた言葉を思い出します。「少しずつできていけばいいんやで」この言葉が無ければ今現在の私は何をしていたらと思う。その人は引っ越していませんが、私の心の中には今でもその言葉が響きます。

昔の私と今の私、他の人は少ししか変わったように見えないけど、私の中では、模様替えをしたように変わりました。その中の一つは、あんなに嫌であった「廃品回収」という言葉がとても好きになっている事です。なぜなら廃品回収は人の役に立っていると考えると、自分の苦しい事も平気だと思えてきたからです。

私がこんなにも色々な事に対して変わったのは、あの真夏に言われた言葉のおかげで、今の私は正しい方向へ進んでいます。でもこの言葉にたよりきりにならず、いつかは自分の力だけで歩いていきたいです。

「そまつにしたらばちかぶるよ！」 高野 葵

わたしのおばあちゃんは、『やまなみ』という所で、おじいちゃんたちのお弁当を作る仕事をしています。いつもとても元気です。

おばあちゃんはいつもわたしに、

「物をそまつにしたら、ばちかぶるよ！」

と、言います。この間は、夕ごはんの時、お肉を残そうとしたら、

「もったいないやろ。全部食べんといけんよ。」

と、言われました。わたしはにが手な食べ物が多いので、しょっちゅうおばあちゃんに注意されている気がします。注意されて、がんばって食べてしまうこともあるけれど、どうしても食べられないこともあります。そんな時は、おばあちゃんが、

「もったいないなあ。」

と言って、わたしが残したごはんやおかずを、全部食べてくれます。それだけではありません。れいぞう庫に入っていて、しょうみ期限が少し切れている食べ物でも

「しょうみ期限はおいしく食べられる期間のことやけん、ちょっとくらいは、だいじょうぶやわ。」

と言って、食べてしまったことがありました。それが原因で、食べた後おなかをこわしたけど、全然気にしていないみたいでした。

わたしとちがって、出されたものは残さず、食べるおばあちゃんですが、この前から「やせないといけん。」

と、歩くようになりました。夜、歩いた後は食べていないけれど、朝と昼にいっぱい食べているのでやせません。おもしろいおばあちゃんです。

どうしておばあちゃんが

「物をそまつにするとばちがあたるよ。」

と言うのか考えてみたら、1学期に昔調べをしたときのことを思い出しました。おばあちゃんに子どものころのおやつを聞いたら、今わたしたちがお店で買って食べているようなポテトチップスやチョコレートなどは食べたことがなかったと言っていました。おやつは、家の人が作ってくれるあられやかきもち、じりやきだったそうです。おばあちゃんが子どものころは、今みたいにいろいろな食べ物がなくて、みんなおなかがすいていました。だから、もらったおやつやおにぎりなどはだいにだいに食べたそうです。だから、今わたしにも、

「そまつにしたら、ばちかぶるよ。」

とか

「もったいないよ。」

と、言うんだなあと思いました。今では信じられないけれど、昔は食べるのに苦労していたんだなあと思いました。

わたしは特にお肉がにが手です。今までは食べたくないの、おばあちゃんに注意されたり、食べてもらったりしていたけれど、これからは、野菜にまいて食べることにしようせんしたいと思います。おばあちゃんに負けないくらい元気でいたいです。

やさしくて、いろんな事を教えてくれる、おばあちゃんがわたしは大好きです。